若越郷土研究

47の1

グリフィスとその時代

－明治維新と日本の近代化－

山下　英一

一

前号（「若越郷土研究」46の1）に続いてグリフィスの"The Mikado's Empire"『皇國』第一部から、まだ考察の終っていない七つの章について検討する。この本（以下ＭＥとする）はニューヨークのハーパー＆ブラザーズ社の「探検、旅行、冒険」の一冊として一八七六年に出版されたもので、旅行記の部類に入る本であったと思われる。しかしその第一部は「紀元前六六〇年からキリスト紀元一八七二年までの日本の歴史」となっていて、明らかに歴史書である。その記述は通史であり、編年史でもある。グリフィスはもちろん今日のいわゆる歴史学者ではない。強いていえば、歴史家といえないことはない。その最も大きな特色はグリフィスは日本をその内側からだけでなく外側との関連において世界史に組み込んで見ている点にある。その上、グリフィスが日本に居た一八七〇年末から一八七五年七月ごろまでの体験を歴史的臨場感として記述に取り入れている点である。

第二十四章「秀吉の目論見－朝鮮侵略」（"HIDEYOSI'S ENTERPRISES.－INVASION OF COREA."）のなかでグリフィスは京都に「耳塚」を訪ねたときの感想を述べる。朝鮮からの戦利品のなかに数千の耳があった。首の代りに耳を持ち帰って埋めた上に大きな土の山を築いた。それが耳塚といわれるもので、見るからに風変りな墓であった。墓は立方体、球体、パゴダの形をした曲線、その上に二個の楕円体の順に積みあげられて天辺の石が天を指す。土の山は周囲七百二十フィート、高さ九十フィート、墓の台座十二フィート方形、墓の高さ十二フィートあった。球体の四面にサンスクリット文字が彫り付けてある。この記述と同じ頁には「耳塚」のさし絵が入っている。グリフィスが所持していたカメラで取った写真から描いた絵であり、さらに寸法の記載によって「耳塚」の全体像が外国の読者に伝わるように配慮されていた。

おもしろいことに、先頃、この「耳塚」のことが写真入りで新聞に出たのである。（平成十三年十一月七日、朝日新聞）知られざる「耳塚」の悲劇という見出しで大学教授が書いていた。それによると「耳塚」は高さ約九メートル、周囲約九十メートルになっていてグリフィスのその寸法とは大きく異なる。耳だけでなく鼻も切り取られ、塩漬けにして送られたとあるが、グリフィスによれば、鼻の記述はなく、酒漬けもあった。その数が十万体をこえるのところはグリフィスでは数千という。しかし両方のカメラアングルがほとんど同じであるのは驚きであった。今日、「耳塚」のことを知って朝鮮半島からの参拝者が絶えず、耳塚供養熱が高まっているという。他方、江戸時代になって日朝国交の修復とともに朝鮮通信使一行の渡来が始まったが、幕府は一行から「耳塚」を簾で隠して見えなく

して、それが事件になったことがあった。これらの事情があって、日本人に歴史上の隠蔽にたいして廉恥心の自覚を促す文章で終っている。

だがこの問題はここで終ってしまって良いものだろうか。秀吉の朝鮮侵略についてグリフィスの考えはこうだ。秀吉は朝鮮を従え、中国を征服し、日本朝鮮中国の三国をひとつにしたいという野心を持った。日本の海外進出と思われる秀吉のこの英雄的行為は異常なほどであった。朝鮮の征服は不首尾に終ったが、日本にとって不名誉なことであった。平和な国民にたいする暴虐な行為の責任はいっさい秀吉に在るといって、次のように述べる。「侵略を挑発するようなことは少しもなかったが、それは一人の人間が外国に入って軍事力を行使する途方もない計画に外ならなかった。」("Here was scarcely a shadow of provocation for the invasion, which was nothing less than a huge filibustering scheme."p.244)

グリフィスはくり返し言う。侵略行為は太閤の意志だけで事が運ばれ、両国の人命の大きな犠牲はすべて一人の人間の野心のために払われたと。それでも日本のなかには朝鮮を日本国の一部であると思っている人が党派をなして一八七二年、七五年と「征韓の叫び」(the cry of "On to Corea!" p.244)が国民を揺したと記した。

第二十五章「キリスト教と外国人」("CHRISTIANITY AND FOREIGNERS")　次にこの章でグリフィスが深い関心と同情を惜しまなかったイタリアの宣教師シドッティ(Sidotti, Juan Baptista 1668－1715)についての記述に入ろう。シドッティの日本における動向については、以下のようだ。神父はまず薩摩に上陸(一七〇九年)、捕えられて江戸へ送られ、小石川の家に監禁される。この家には検閲官、裁判官、学者、通訳が集まってシドッティを取り調べたり、外国に関する質問をして多くの知識を得た。赤い紙で十字架を作って部屋の壁に張り付けていた。囚われ人となって江戸に数年住み、最後はおそらく普通の死に方をしたであろう。その小石川の家はその後キリシタン坂と呼ばれる坂の上にあり、坂の下はキリシタン谷、その辺全体はキリシタン街と呼ばれた。近くの別の建物には信じていたキリスト教の撤回を強制された老夫婦が監禁されていたが、シドッティが来てからは勇気づけられて再び撤回前の信仰を抱くようになる。

家康のキリスト教禁止令(一六〇六年)より百年あまりも後に、日本をもう一度キリスト教を信じる者のいる国にしたいと思って来た神父のあったことに強い肝銘をうけて、グリフィスはその異端審理の裁判の行われた場所と殉教者の墓を見つけて訪ねることにした(一八七四年)。シドッティについて忘れてはならないことに新井白石の『西洋紀聞』がある。グリフィスはこの書のなかの話はどれもおもしろくて深く心にしみると述べているが、白石のことをこの神父からくわしく聞き出した学者と書くだけでその名を記していない。意外に思ったのは、この書物はS・R・ブラウンによって発見されたとグリフィスが書いていることである。ブラウンは一八五九年に来日したアメリカ人宣教師で、グリフィスにその伝記 "A Maker of the New Orient, Samuel Robbins Brown"(1902)がある。

シドッティは、住んでいた小石川のキリシ

タン坂と反対の谷の、古い松の木の下で水の湧き出るそばに埋められたという。竹やぶの下の草で見分けのつかない狭い道を突き進むと、無名の石が一つ、くぼ地のそばにあった。明らかに長い間に倒れて朽ちていった樹木の残した穴であった。すぐ辺からかすかに水が湧き出ていた。墓の台座は粗末な一個の石で、それには水をためる穴がついていた。二つの石とも荒けずりでのみの仕上げがしてなかった。

このときの印象をグリフィスはこう述べた。「日本ではこういう石は世間から悪く見られて死んだ人、また無名や、無縁の死者の墓であると一目でわかる。神父の墓を訪ねてきてその人のことを偲ぼうにも目にすることが出来たのはこれしきだった。シドッティの勇気ある生涯はもっと立派な墓石を建ててもらうにふさわしかった。」("Such stones in Japan mark the graves of those who die in disgrace, or unknown, or uncared for. This was all that was visible to remind the visitor of one whose heroic life deserved a nobler monument." p.263) 加藤周一は論文「新井白石の世界」(『日本思想大系35新井白石』岩波書店 一九七五年、解説)において、シドッティを次のように評価した。白石とシドッティは「もし相手が同国人であったならば、鶏群の一鶴たるべき人物として、相互に認めあっていたのかもしれない。」白石は外国人宣教師に発した鋭い訊問のうちにも、相手の人格を尊敬し、その環境に自分を置いて見ることのできた開放的精神の持主であったというのが加藤の白石観であった。

以上、一つは京都の「耳塚」、もう一つは東京の外国人宣教師シドッティの墓をグリフィスが訪ねたときのことや感想を書き出してみた。いずれの場合も日本と外国、ということは日本人と外国人という関係での歴史上の出来事であり、それらをある限られた時代に日本の外から第三者として一人のアメリカ人教師がどう理解しているかを知ることにねらいはあった。「耳塚」は傲慢な支配者の一人芝居で無数の人命が失われた言語道断のふるまいであったというのがグリフィスの判断であった。歴史的事件を顧みるときいつも白黒の決着がつくとは限らないだろう。しかし「耳塚」の場合は黒は黒の判断でその大罪の責任は大いに日本にありと思わせたグリフィスは正しかった。また外国に向って国を鎖した日本にキリスト教の宣教のために生命がけで上陸して幽囚の身となって果てたシドッティをグリフィスはいくら同情しても足りない気持であった。維新前後にキリスト教の布教や西洋の技術と教育を教える目的で大勢の外国人が雇われた。そのなかには異郷の地に葬られた不幸な仲間もいた。福井のグリフィスは同じ年ごろのイギリス人で金沢藩の英語教師に雇われて赴任途中に大聖寺で天然痘にかかって死亡した例を見ている。リトルウッドと呼ばれるこの不帰の客は幸いに藩によって手厚く葬られたがグリフィスはその墓を訪ねていた。日本人にはおそらく測り知れないこの種の悲しみが、グリフィスをしてこの百五十年前のシドッティの死とその残された偉業について書かざるを得なくした。グリフィスのこのMEはその三十歳という若さの文章であり、荒けずりなところもあり調査に至らぬところも多々あるが、それだけに反って生木のごとき思うことを臆面もなく述べて怯まぬところの無垢な精神が旺盛なのが特色といえよ

う。

二

日本人の国民性と思われる、違いの分る特色をＭＥの中から前号では九つ列挙した。ひきつづいて更にグリフィスのいう日本人の特性(the trait in the character of a Japanese)のいくつかに耳を傾けることにしょう。その一つは「日本人が見せかけにころりと負けてしまいがちの国民である。」("The Japanese are an intensely imaginative people,...")というのは、何であれ感覚でもって美しいととらえてしまう心をひきつけるもの、想像力を焚き付けるものなら、日本人の多くはこぞってその宗教の指導者の意のままにあやつられることになるというのである。これは第二十五章（前述）に出てくる文章であるが、「日本人の宗教の指導者」とはいわゆるキリシタン大名のことであった。グリフィスの筋書によれば、外国人（ここではスペイン人、ポルトガル人）とキリスト教と鉄砲は手に手を取って日本にやって来て、それらが播いた種は陰謀、迫害、扇動、反乱、内戦といった作物になって現われ、六万人の日本人の流血がその収穫だったということになる。その当時、十六世紀の日本や西洋の事情については説明を省くとして、グリフィス自身がキリスト教信仰の歴史からカトリック教（日本の天主教）に批判的であった。と同時にカルバンの説くプロテスタント（新教）の厳格な信仰生活を守るクエーカー教徒の都市フィラデルフィアに生れ、そこの改革派教会の一員であったことを忘れてはいけない。政治的混乱に貧困という精神的土壌のなかで、日本の神や仏は人々の苦悩をなぐさめてはくれなかった。そこへカトリック教の僧侶が十字架、雄弁な口舌、豪華な衣装、儀式、行列、秘蹟などを引っ提げて現われたのに仏教徒は度肝を抜かれてしまった。「印度の宗教からローマの宗教への変移はいとも簡単であった。」("Furthermore, the transition from the religion of India to that of Rome was extremely easy." p.252) それほどこれらの宗教は形式に共通したところがあり、それもまた天主教なる宗教が日本人の心をつかんだ理由にもなったというグリフィスの意見はおもしろい。

第二十八章("THE RECENT REVOLUTION IN JAPAN")この章はＭＥ初版のなかでも内容、筆力ともに傑出した論文になっている。そのはずでグリフィスは一八七四年に帰国して、これをその翌年、ニューヨークのThe North American Review誌の四月号に発表していた。この論文をＭＥに入れたとき、グリフィスは削除、改訂、補足加筆などの推敲をした。そのことについては筆者の二つの論文「『維新外論』考」、「『日本近世変革論』考」に詳しい。(『グリフィスと日本』山下英一、一九九五) いずれも鹿島藩士、牟田豊（英学者）の訳文の書名で、前者は一八七五年（但し上巻のみ）、後者は一八八二年（上下巻）に出版された。

この章でグリフィスは二つの国民性に言及している。その一つはペリーの来航につづいて十年ほどの間に日本にやって来た外国人が、日本人の特徴として最初に重要視することになった日本人はウソをつくという結論であった。そのウソは江戸幕府のなかでどこでも執拗に行われた。しかもその実行者は、個人的にはおどろくほどの器用な才能と卓越した独創力を持った人たちであった。これは

なにも日本人がもともとウソつきということでなく対外国との垣根のなかでウソつきになったというのである。というのは幕府自体が巨大な欺瞞のかたまりになっていて、公私にわたってウソをつく癖をつけてしまった。それがいろんな形の虚偽を生んで、「ついに明らかにつかなくていいウソまでもつくほど好んでウソをつくことが日本人の習慣になった。」（"...until the love of a lie apparently for its own sake became a national habit." p.295）グリフィスが言いたかったのは日本の政治が二重構造になっていて、天皇か将軍のいずれに政治の実権があるのか、国交を求める外国人使節を困惑させた外交的詐欺のことであった。しかしこれはグリフィスが日本には支配者と呼ばれる人は唯一、天皇しかいないと、自身、日本に来て考えることのできた場合の言い分でしかなく、幕府にとって急場を凌ぐ手段はウソをつくことであっただろう。たしかに将軍職はグリフィスから見ると武力で天皇の座を奪い取ったものだが、家康が将軍のとき外国に対して「大君」("tycoon")と自称した。「大君」は「日本国大君」の略だが、グリフィスはミカド（天皇）に対して外国人に用いられたこの称号を尊大であり、外交的詐欺とみなした。「大君」は純粋に中国語で、家康は自分が日本全土を支配する最高権力者であるとしてこれを用いた。グリフィスはこの大君の幕府を白い腹と黒い背をした蛙にたとえた。京都（天皇）から見ると、大君は白で無意味な称号("...the lie was white,..."p.304a white lieには外交上のウソという意味もある)であり、だまされ易い夷狄が眺めれば大君は黒（たちの悪いウソ）でペリー条約の前文にある「日本皇帝」であった。ところがこの外交上のウソが外国にとられまいと用心する天皇と宮中にとって最もたちの悪いウソとなって最大の不安と恐怖を生むことになった。蛙のたとえでユーモラスに大君と天皇の二重構造を語った上で、グリフィスはさらにイソップ物語から江戸蛙と京都牛の話にして牛に対抗してはち切れた蛙に幕府をたとえている。一八七二年、静岡の徳川家の古い屋敷を訪ねたグリフィスは、そこにペリー提督からの贈物が多数あるのを見た。その一つ一つに「合衆国―から日本の皇帝に贈る」とはり紙のついた、しかも天皇は見たことがないものばかりが、かびついたり、さびついたりしていて、すっかり忘れられてあったという。「日本人はあざけることに長けている。しかしこれだけ大きな皮肉をいつ飛ばしたのか。」("The Japanese excel at a jibe, but when did they perpetrate sarcasm so large?" p.304)

同じ章のなかでグリフィスがあげている日本人の国民性で最もすぐれているのは「自分が間違っていたり、劣っていることが分ると、進んでそれを改善しようとする気持ちである」という。("...his willingness to change for the better when he discovers his wrong or inferiority."p.317)「当時の指導者にこの気持ちがあったからこそ一度は破棄した信頼を回復し、一度は培った信頼を破棄した。」("This led the leaders to preach the faith they once destroyed, to destroy the faith they once preached." p.317) "faith"という英語には人間信頼という意味の他に信仰、信条、誠意といった訳語があるが、その原義は「信」(いつわらないこと)にある。明治維新がグリフィスのいう「革命」("a revolution")なら、それは転換をはかって一つし

かない「信」の価値をとりもどすことであり、それには破壊をともなう。問題はグリフィスが何をもって「信」と思ったかである。また「回復する」とか「培った」という訳語を与えた"preach"という英語は「解き明かす」の意味であり、これが"preach Christ"になると「キリストの道を説く」という意味である。いかにも"faith" "preach"の二語は「革命」にふさわしい、かつグリフィスの選んだ、維新を精神的にとらえた適語であり、西洋文明の導入といった外からの物質的刺戟にもまして内からの衝動を表現していた。このような言葉を用いて観念的であるが、そのためにかえってグリフィスの文章は西洋の読者にそれのもつ意味の大きく深いことを思わせるものになった。

明治新政府の基礎となる誓約（五箇条の誓文）はグリフィスのこの観念の具体化された言葉から成ると思われる。そこにはこの誓文で何に「信」を置くかが新政府の指導者たちによって論議されていた。さいわいＭＥにはグリフィスの文章で誓文が書いてあり、いわゆる英訳でなく、解釈、つまりグリフィスの理解として読んでみたい。「①審議のために人が集まる会にすべきである。そこでの議案はすべて会の人みんなの意見で決議すべきである。②前の時代の慣習になっていた発達程度の低い社会や文化に打ち勝つべきである。自然の機能のなかの偏見のなさや公正を自分のなかに取り込んで、それを基礎にして活動すべきである。③世界中の知性と学問を探し求めてきて、天皇の国の基礎を築くべきである。」（ＭＥ p.318）これで見ると、①は誓文の「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」、②は「旧来ノ陋習ヲ破り天地ノ公道ニ基クヘシ」、③は「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」に相当する説明書きになっていて、公論、正義、知識の三つの「信」の分野で日本が目覚めることを宣言したことを伝えた。それが日本が外に向って「国際礼譲」（"the comity of nations"一国が他国の法律と制度を礼を厚くして謙虚に認めること）の仲間入りをする第一歩になった。グリフィスはこう考えて以上述べた三つの誓文を特記した。あと二つの条文、すなわち、「上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ」、「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」は日本国内のことで統一（"national unity"）のために国民が背負わなければならないことなどで、グリフィスは敢えて記述しなかったと思われる。

この論文では日本人の国民性としてグリフィスが考えた三点について、はじめに、「想像力の強い国民」（"an intensely imaginative people"）、次に、「ウソの好きな癖」（"the love of a lie"）、そして三つ目が、「改善に進取なこと」（"his willingness to change for the better"）をあげた。これらに共通するのは将軍という天皇の座を奪った成上り者（"parvenu"）が事実上の日本の統治者となって、やがて封建制度を確立して行く、その歴史の流れのなかで避けられない外交上、宗教上の目的で来日した外国人とのいろんな形の衝撃があったとき、日本人は如何に対応したか。これを日本人でなくしかも日本について考えることのできる有利な立場から日本人論として書かれたのが The Mikado's Empire であった。しかし国民性は固定観念ではない。時代とともにあり生生流転する万物のようである。またいつも白と

ばかり言えない、黒にもなる。こういうなかで白でも黒でもなく、流転しないものがある。グリフィスはそれを"faith"と言った。いくら客観的に資料に基づいて歴史を書くといっても、書く人に"faith"がなければ歴史ではない。一八七一年、グリフィスは福井藩の理化学教師に雇われて福井に住んでいて、封建制度の崩壊をサムライのなかで目のあたりにした。その十月一日の日記に書く。「藩知事が私的生活に入るために、家来に別れを告げる。」、そのあとに「―封建日本が文明国家に移りかわろうとする。」("―Feudal Japan merging into the civilized empire")MEのなかでもその体験を、それまでの生涯で最も印象を受けたと書く。そこには福井の庶民の見せる見送りや涙、笑顔、心のこもった別れのことばがあったと書く。「それまでの日本の歴史で天皇とその位にたいする尊敬ほど強い国民性と政治の力を表したものはなかった。」("…, in all Japanese history the reverence for the mikado's person and the throne has been the strongest national trait and the mightiest political force." p.323)

三

封建時代に入るまでの朝廷と武士の関係が信長、秀吉、家康につづく将軍と天皇の関係へと支配力が逆転してきた。グリフィスの記述も『古事記』(七一二年)から『大日本史』(一七一五年)、『日本外史』(一八二七年)に拠るところが多い。ここでは封建制度の支配者について、次に近代国家の指導者についてグリフィスがどのように理解していったかを考えてみたい。

「織田信長は神道信者として教育を受けたことで仏教徒を敵として憎むようになった。」("His education as a Shintoist made him hate the Buddhists as enemies." p.232) 足利時代は仏教の僧侶が権力の絶頂にあり、とくに比叡山は寺院、僧の規模は大きく隆盛を極めていた。これに暴力を加えたのが信長だが、その後、支配者はこの例にならって、しばしば国の平和を乱す恐れのある大きな勢力を持つ宗派の根拠地に暴力を加える羽目になったという。グリフィスはこの信長を書くにあたり、越前福井の越知山のふもとの村、織田から始めた。それはこういう話だ。源平時代のこと、神道の僧が一人近江路の途中で津田村の名主の家に泊ったとき、そこの義理の息子を神職に貰い受け、織田チカザネと名づけた。この男の子は平清盛の曾孫で、父スケモリは源氏に殺されたが、母は近江へ逃れて津田村の名主と結婚した。信心深い母は息子の願っても無い話によろこぶ。その子は織田に戻されて住むことになった。成人して結婚と同時に神主になって、神職の一家を成した。その子孫に柴田勝家(有名な越前の英雄)、織田信長がいるというのだ。このように信長の氏素性が平家と神職であったことが、信長を源氏の独り舞台である将軍の称号はなく、仏教徒から悪魔の化身と呪われる支配者にしたとグリフィスは結びつけてみた。さらに信長に欠けていたのは行政力と戦いで得た勝利を平和の裡に追求して行く能力のなさであったと付け加える。冗談が過ぎて恨みを買うことがあった。上機嫌な信長が明智光秀の頭をわきにかかえて、太鼓の代りだといって扇子をばちにして頭をたたいて調子を取ったというのである。MEのなかにこのようなエピソードを入れるのをグリフィスは忘れていなかった。注

目すべき二つのことがある。一つは信長がイエズス会の布教師を支持したことで、これは信長のような支配者が西洋に好奇の目を向けた最初の出来事である。もう一つは「今日まで、日本の仏教の大きな宗派は信長の加えた打撃から完全には立ち直っていない。」("To this day, the great sects in Japan have never fully recovered from the blows dealt by Nobunaga." p.235)という指摘である。これは一八六八年の神仏分離令に始まる仏教排斥運動のことであり、こういうところにもグリフィスの歴史を見るときの想像力の豊かさを思う。現在、織田町の劔神社の境内には護摩堂があって、神仏混合の名残をとどめている。もっともこの風景は信長に縁の寺であるなら皮肉にも見えるが。ME第十六章「日本の仏教」にいう「日本の仏教は徹底的な研究をするだけの価値が十分にある」("Japanese Buddhism richly deserves thorough study,…"p.174)との考えからグリフィスの目は離れていない。

豊臣秀吉とその時代へ移ろう。グリフィスは太閤秀吉を称して"the august parvenu"といった。「尊敬するに足る成り上がり者」の意であり、信長の馬丁から身を起こしついに日本国を統一するまでに上り詰めた人のことをいう。では秀吉の始めた仕事の何をもって実際に日本を一つにまとめた男("the real unifier of the empire")が秀吉であると言えようか。グリフィスの上げるのを見ると、一、目ざましい行政(検地、刀狩)　二、家臣に土地の下付　三、秀吉とその家族に拝領地の下賜　四、芸術科学の隆盛(聚楽第、造船技術)五、気力に満ちた軍事的企てと国内政策の改良(朝鮮侵攻、ヤソ教の厳禁)などがあった。その上にこの時代を特徴づけることとしてグリフィスは船の建造の高度な完成と商業の広い地域とその多様性を強調した。いわゆる朱印船による南方貿易のことである。グリフィスは朱印船の絵を見て大きさはコロンブスの船に優り、性能は同時代のオランダやポルトガルのガリオン船(三、四層の甲板大帆船)に同じで大砲(日本製の元込め砲)が装備してあった。秀吉の十六世紀にはその航海は貿易であれ、発見や海賊行為であれ、インド、シャム、ビルマ、フィリピン諸島、南中国、マレー半島、北の千島列島に及び盛んであった。日本人が勇敢で冒険好きな国民であることはこのように自由に("with a freedom")海を歩き回ったことでも分る。しかも陸地に閉ざされた日本人しか知らない者には信じられないような自由があったとグリフィスは想像している。そしてこれを研究して行くと日本が西欧世界にその存在を知られていなかったころにいかに広い範囲にわたって影響力を持っていたかが分るだろうと書く。「多くの国の外国人と接触して、探究心や研究心に目覚めた。」("Contact with the foreigners of many nations awoke a spirit of inquiry and intellectual activity,…" p.246)これがグリフィスの守ってきた持論であった。しかしここでの天分と不断の活動に最も適した場は海の上であった。

第二十六章「家康、江戸の創設者」は関ヶ原の戦いを中心に徳川家康の人となりについて述べている。("Nevertheless, he was fond of whims."p.268)とあるようにグリフィスは家康の酔狂ぶりに感心している。兜もかぶらず額に鉢巻をして戦う(霧が深くて二、三フィート先が見えなかった)などエピソードがいくつも入っている。グリフィスの使った"whim"

という言葉には衝動性がある。大垣の柿の話がある。家康が岐阜に着いて主力の軍と合流したとき、何者か一個の柿（大垣）を家康にさし出した。それを手にして「大垣わが手に落つる」というや、家康はその柿を下に投げたところお供の者がその割れた甘柿を縁起をかついで食べたという。この戦いに勝って家康は一六〇三年、江戸に幕府を創設した。その後、二世紀半のあいだの深い平和（"profound peace"）の歴史がつづいたが、それほど長く平和の恩恵をこうむった国は世界にないといって、グリフィスはそれを次のように分析した。一、信長、秀吉とつづくいろんな要求の終息　二、徳川家の将軍継承の制定　三、キリスト教の悲運　四、世界からの日本の孤立　五、幕府と宮廷の二重構造と封建制度の永続化　六、江戸の繁栄と大きさ。

グリフィスは家康の天分を封建諸侯の地理的配置に見ている。徳川家に恨みを抱く二つの有力な藩が隣り合っているところには家康は自分の親族か直属の家臣を両者の間に置いてその連合や陰謀を防いだ。野心のある指導者が天皇を人質にとることのないよう京都を守った。しかし徳川家、三家ら親藩の大名、国主大名、譜代大名、外様大名というように日本が小さく断片的に分かれていて、「真の意味での国家意識がなく、外国人との接触の衝撃に耐える用意が全くできていなかった。」（"...,without real nationality, and utterly unprepared to bear the shock of contact with foreigners." p.275）一八七一年に越前福井で生活を送ったグリフィスは多くの身分のある家族の子孫と知合ったが、その人たちの先祖は二世紀以上も深い失望をいだいてきた。将軍家康が世継ぎに三男の秀忠（太閤の娘と結婚した）を選んだからであった。家康の二男、秀康は越前藩主であったが、その家臣は徳川家の最も忠実な家来と思っていて、秀康の第二代将軍を期待していた。こういう記述にもグリフィスが体験からくる深い洞察力を持っている作家であったことが知られる。「地位と役名を持つことが日本人の主情である。」（"The possession of rank and official title is the ruling passion of a Japanese." p.276）グリフィスは武士階級のサムライをまずこのように見た。サムライのことを"the military－literati of the country"と称してもいいとグリフィスはいう。これは加藤周一のいう「武士知識人」である。（前述の「新井白石の世界」）むろん加藤は白石のように武士支配層のなかにあって、外国の文化に深く接した生涯を送った人を指してこう称していて、他にも別の意味で武士知識人はこの時代にはいた。と同時に長い平和のうちに怠惰と安易の生活に甘んずる「武装したなまけ者」（"armed idlers"）に成り果す危険なサムライも出てきた。似たような意味でこれらのサムライは（"non－producers"）「穀潰し」、（"genteel loafers"）「家柄のいいなまけ者」とも呼ばれた。大名の世襲財産についてグリフィスのいう西洋の制度との違いは、下付された土地は将軍の明白な許可なしには、結婚、売買、腕づくなどによる増減は有り得なかった。この限られた財産のなかで大名は家来を養い、主従の関係を保っていた。その体制を造り強固にし、長くつづく平和の礎を築いた最高の権力者が家康であった。一八七二年夏グリフィスは友人のアメリカ人、南校の優秀な生徒三人（このなかに福井から連れてきた今立吐酔もいたと思われ

る）の五人が日光まで旅をした。そこで一週間、目の覚めるような景色と厳かな感情につつまれて楽しく過したことがＭＥにのっている。日光東照宮には東照大権現（朝廷から贈られた家康の神号）の遺体が葬られてあり、権現とは仏教でいう仏が仮に神として身を現わすこと（垂迹）であるとグリフィスは知っていた。

江戸幕府十五代将軍、徳川慶喜は、日本人は一般に気が変りやすい"fickleness"のが主な特徴と思われているが、それを絵にかいたような人であった。（第二十八章「日本における近年の大変革」）グリフィスが"the vacillating Keiki"と決め込むほど慶喜は「言動が左右に揺れる」"the waverer"（気迷いする人）であった。それは一国の危急事態に「せいぜい一枚の羽根の如き固さ」("only the firmness of a feather")でしかなかった。首尾に一貫性のない約束は危機を早めることになった。一人の人間として、慶喜は高い教養のある身分の人。けれども野心的で薄志弱行の人である。政治上は義務を果たしただけで、用心は勇気の大半といったところがあった。またこの人に意気軒昂な人間性や目だった天分は見られず、将軍として生涯の最後にして最善の決定は勝海舟と大久保利通によって成された。グリフィスは聞いた話として、慶喜がワシントンと比べられているという。それは慶喜が味方の軍の先頭に立つのを拒否し、長い間の内戦から国を救わなかったからだ。しかしそれが少しも好い話には思えないと言って慶喜の身を気遣っていた。慶喜はグリフィスの三つ歳下であった。

松平慶永（春嶽）、橋本左内、福沢諭吉、中村正直。第二十八章の終りでグリフィスは一八六八年の大変革と新政府に至る歴史の経過をその順に十五の項目でまとめている。その最後の項「開化と教育の仕事、これのみが近代文明に向う動きを確実に成功させるものだが、これが日本人の学者、政治家、純真な愛国者によって始められ、遂行された。」("..., the work of enlightenment and education, which alone could assure success to the movement, was begun and carried on by native students, statesmen, and simple patriots." p.323)これらの人のなかから慶永、左内、諭吉、正直についてグリフィスの記述を読んでみよう。

ＭＥ三〇八頁に慶永の肖像画がある。一八六二年、政治総裁職の衣冠をつけた坐像である。冠と纓を頭上に、檜扇を右手にした官吏の服装である。松平慶永は旧越前大名で、この絵は慶永からグリフィスに贈られた名刺用写真（約五、七×九、五センチ）から取ったと説明がある。とくに顔の表情に威厳がある。ＭＥ第一部には五十の挿絵が入っているが、写真からのはこの外に、アイヌの首長、天皇睦仁、皇后美子、耳塚、慶喜の五作品に過ぎない。慶永の命令で大名が江戸に住居を強制される慣例が無くなった。（一八六二年では参勤交代制度の緩和の段階）このことは信じてよいが、「慶永は十中八九南部大名（薩長肥）の道具に喜んで使われる人に過ぎなかった。」("...he was most probably only the willing cat's-paw of the Southern daimiōs," p.307)であろうことをグリフィスは分っていた。

安政の大獄で犠牲になった愛国者のなかにオランダ語と中国語に通じる洋学者、橋本左内がいた。左内のことをグリフィスはその弟で友人の福井藩医の橋本綱維から聞いてい

た。左内は福井に西洋科学への強い興味を起す媒介者になった。そのことがついにグリフィスの福井任命となったと書くのは正しい。外国人と平和な国交を開く必要はあるが、その際、日本が朝廷と幕府に分れて政治を行っていっては荒廃してしまう。この左内のいうことも正しいとグリフィスは思う。なぜならペリーが天皇と交渉すれば対外戦争になっていただろし、幕府と交渉したら内乱が起り、敵愾心、国家の疲弊、国民の困窮が長びいたであろう。

明六社の結成メンバーであった福沢諭吉と中村正直を同じ社員のグリフィス（通信員）は知っていた。MEで英学者で教師の諭吉（グリフィスの九歳上）と正直（十一歳上）についてその西洋文明の紹介と翻訳の仕事を高く評価した。諭吉は西洋思想の吸収（"assimilation"）によって日本人の排外感情をなくし、欧米の進歩の仲間入りをするという考えの誰よりも顕著な実行者であった。それがはっきり表面化したのは、諭吉は明治政府の公務への甘言を拒けて依然として自分の学校と教育と翻訳に献身していることでも分る。グリフィスはその諭吉を「貴い骨折り仕事に一生を費している」（"....consuming his life in noble drudgery." p.320）と評した。"drudgery" という英語は「退屈で卑しく不快な仕事」というような意味がある。一方、正直の『自由之理』（J・S・ミル）と『西国立志論』（スマイルズ）を上げ、とりわけキリスト教と信仰の自由の問題に関する請願書を出して、天皇と朝廷に深い印象を与え、極端な神道信仰者を阻止したと強調した。これらの洋学者と交際するうちに、彼等が日本語で書いた書物の何にもましていかに日本人の精神を変え、近代文明に向って高ぶった気持ちにさせて来たか、そのことを確信してグリフィスは四年の日本生活をあとに帰国して行く。

四

"The Mikado's Empire"『皇國』を今日の日本人が読む場合に気をつけたいのは自分の持っている日本の歴史の知識のみを盾にして挑戦的にならないことだ。これはかつて内容が国情に不都合なところがあって日本のアカデミズムの歴史学から無視されたと思われる不幸な時代があった、それよりも一層、困ったことである。日本論の古典の一冊になっているこのMEを謙虚な気持ちで百三十年前の著者と対話をするように読むのでなければその名前が泣く。読めばそこに過去の人間が生き返る。今の日本人と比べてどうだろう。グリフィスは日本人の何に大切なものを見つけようとしたか。日本人のそれを見出すことによろこび、期待するグリフィスという人間の知性はどんなであったろう。この人は日本の最も大事な時代の一つに来て教育の仕事を立派につとめている。そこで得た体験、見聞を書き留める関心があった。読むことはときには作者の思う以上のことを過信したり、作者の意図を読みとれずにいたりする。前者は注意すれば足りるが、後者はとり返しがつかないことになる。知識はそれだけでは生気がない。肝要なのは知識を生かして想像、直感、人間性を文章に活かす。グリフィスの『皇國』はそういう一冊であった。そして読者は実はそこから自分について考え始める。古典が与えるものは結局、読者の今に生きるという実感に外ならない。

雑誌「群像」（二〇〇二年一月号）でたま

たま対談のなかの文章をおもしろいと思った。それは「世界認識の方法」ということで、文芸評論家、加藤典洋のことばである。「世界認識の方法というのは、①内部にいる人間が内部にいながらどう正しく井戸の外を認識できるかという問題構成だったんですが、これを世界の認識の問題として考えれば、そこにはもう一つ、②外にいる人間がどのように外から、内にいる人間によって生きられている事象を認識できるか、という逆の世界認識の様相があることがわかる。」（「存在倫理について」吉本隆明　加藤典洋）（傍線は筆者）世界認識は歴史認識に置き換えることができよう。これを読んで①の方法を取ったのが新井白石であり、②の方法を選んだのはグリフィスであったと思う。その認識をグリフィスはＭＥのなかに投入した。しかもその②のなかに①を取込んで、②外から（①外を認識する）内を認識するということに重点を置く二重構成になった。つまり外国人グリフィスは日本という国を対外への働きかけの変遷のなかで認識しようとしたのだ。

この内と外の命題についてＭＥのなかで特筆すべきところは第二十八章最初の頁のパッセージである。「これらの原因は主に内部から生じたもので、外部からではない。衝動からであって、衝撃からではない。」（"...these causes operated mainly from within, not from without; from impulse, not from impact;" p.291）これらの原因の「これら」とは外国人への国策の大きな変更、日本が亜細亜の文明を理想とするのを拒否して西洋のそれを採用した主として武士知識人による改革を指す。本来、幕府の没落、天皇の復位、封建制度の廃止の直接の原因は外国人の到来にあるというのが欧米の一般的印象であった。グリフィスはそれが「原因」("cause")ではなく「誘因」("occasion")であったことを論じて見せようとした。そのために内なる原因と外なる誘因の両面から日本の歴史をふり返って見た。その努力の結集したのがＭＥになった。さらに同時代人として、日本がキリスト教国を競争相手にして行かねばならな現実を忘れてはいない。しかもそれらの諸国は富み、強く、かつ積極的("aggressive")だという。

一八七二年三月四日、遣欧米特命全権大使岩倉使節団の一行は米国ワシントンに第十八代大統領グラント将軍を訪ねて親書を渡す。森有礼が通訳した。三月六日、議事堂を訪ね、国会の場に歓迎される。「この日こそ日本が世界の歴史の舞台に堂々と立てたことを明白に示した。」("This day marked the formal entrance of Japan upon the theatre of universal history." p.324)この印象的な文章でグリフィスは "The Mikado's Empire" 第一部の幕を閉じた。そのころグリフィスは福井を発って（一月二十二日）、南校で教えるために東京に着いて（二月二日）またいく日も経っていなかった。

【ＭＥ執筆に最も負うところの多かったアーネスト・サトウ（奇しくもグリフィスと同じ一八四三年生れで、歿年も一年後）とのこと、明六社のなかのグリフィス、ＭＥ出版の反響、ＭＥ初版と二版の補註などのチェックについてなどいくつも書いておきたいことがあり、次の機会を約束したい。】